

「音節・シラブル・拍・モーラ」の 術語解釈の変遷

—— 明治期から現代までの国語辞書による解釈から ——

任 星

キーワード：音節、シラブル、拍、モーラ、国語辞書

はじめに

「音節・シラブル・拍・モーラ」の四つの術語は音声学および音韻論でよく使われている専門用語である。現在では、音声学関連辞書はもちろん、一般の国語辞書でもこれらの解釈を調べることができる。『言語学大辞典』(1996)によれば、日本語学で言われる「拍」という術語は亀井(1956)の用語であると書いてある。また、『国語学大辞典』(1985)によれば「モーラ」という術語は服部(1953)が最初に使ったと記載されている。ところが、「音節」と「シラブル」は誰の用語であるかはまったく不明である。ほかに、川上(1972)では「「モーラ」はラテン語の *mora* (モラ) に由来するが、英語を経て日本に入ってくる間に、どこかで「モ」が「モー」に延びてしまったものらしい」と語彙変化に関する非常に興味深い課題を残している。さらに、この四つのことばはいつから使われ始め、国語辞書ではいつから定着し始めたのか、その解釈はどのように変化してきたのかなども、音節・モーラの基礎研究では必要とされるが、これに関する論文や文献はほとんど見当たらない。

これらの諸問題を解明するべく、本稿では、国語辞書から四つの術語について、いつから使われてきたのか、また、使い始めた当時の解釈と今現在の解釈にどのような変遷があり、言語学的に解釈されたのはいつからなのかなどについて調べ、音声学における音節やモーラに関する研究のための基礎資料の作成を目的とする。

1. 調査方法

明治期から現代までの国語辞書を調べ、四つのことばについての解釈や事例を集め、年代順に整

理して並べ、言語学専門辞書および音声学・音韻論関連文献での解釈と比べる。

2. 調査資料

明治4～17年(1871年)に出版された国語辞書をはじめ、2006年に出版された国語辞書と言語学および音声学関連辞書を合わせ、近現代の百冊あまりの辞書を調査対象とする。

3. 調査結果

今回調べた国語辞書での調査結果は次のいくつかの点にまとめられる。

3.1 術語が最初に出現した辞書(年代・解釈)

今回の調査対象となった辞書では、表1に表したように、「音節」が最初に出現したのは『大辞典』(1935)で、「シラブル」が『日本大辞典源泉』(1928)、「拍」が『日本大辞書』(1892-93)、「モーラ」が『国語学辞典』(1955)である。「音節」の解釈では「シラブル」の訳語であるとの解釈から「シラブル」の方が先に出現したことがわかる。実際に「シラブル」の出現年代をみても明らかに「音節」より早い。「拍」の解釈は「タタク」の意味で解釈されているが、実際、中国語の意味と同じ意味で解釈されていることから漢語の影響であるといっていいたいだろう。「モーラ」は服部(1953)で使われ始めたという解釈があることから、使用開始2年後、辞典にその術語が載っていることはありうることだと思われる。したがって、国語辞書における「モーラ」の出現年代は1950年代であると確定してもいい。

表1

音 節	シラブル	拍	モーラ
大辞典(1935)	日本大辞典源泉(1928)	日本大辞書(1892-93)	国語学辞典(1955)
シラブル syllable の訳語。 単語の音数、単語の構成単位を考え得る発音乃至発音群、音節構成的音素を「音節頂」といひ、普通は母音であるが、有声子音や無声子音の場合も稀にある。	英(語)父音と母音との相愛して成りたる音。綴音、合成音、音節、熟音。	タタク・ニウツ(手ナドヲ)、拍手	mora 元来は韻律学(prosody)の用語で、一単音節の長さに相当する時間の単位。韻律論では子音音表。

他に表1から分かるように、「音節」「シラブル」「モーラ」についての解釈はすべて言語学的な解釈であるが、「拍」は日本語学で扱っている「拍」とは異なる解釈であることがわかる。実際に言語学的に解釈された最初の辞書及び年代は次のようである。

表 2

拍
新潮国語辞典 (1965)
①拍子。拍子を取ること。 ②日本語の発音が同時間のリズムがくぎりになっているとする考えに基づいて数えるもの。「音節」に大体当たる。

表 2 で示したように、『新潮国語辞典』(1965) では『日本大辞書』(1882-93) で解釈されている意味以外に日本語学で用いられている意味解釈が増えたことに気がつく。このことから亀井(1956) で「拍とは日本語において、アクセントによる相関を形作りうる最小の単位(以下略)」と最初に言語学的な定義をしてから国語学辞書に載せられたことを証明できたことになる。

出現年代から分析してみると、明治期の国語辞書では「音節・モーラ・シラブル」について解釈がなかったため、大正期や昭和期に入ってから使われたと言える。また「拍」については、そのことば自体は、明治期から使われたが、音声学的な術語解釈があったのは、20 世紀半ばからであることがわかる。

したがって、上の解釈から国語辞書での四つの術語の出現順が次のように決められる。

最初 → 最後
「拍」→「シラブル」→「音節」→「モーラ」

3.2 意味の変遷

表 1 では、「シラブル」の解釈が「音節」より早く辞書に出現したことがわかった。また「音節」の解釈をみると、「syllable, 「シラブル」の訳語」であると書いてあったため、言語学で用いる日本語の「音節」の語源は「syllable, 「シラブル」」であると言える。

表 3 は四つのことばの最初に出現した辞書での解釈と 2006 年度に出版された辞典との比較である。明らかに 2006 年度出版された辞書では解釈が詳しくなっていることがわかる。それほど、国語学辞書で定着したことがわかる。

『精選版日本国語大辞典』(2006)での解釈では「声、または音楽の調子。ふしまわしやリズム」という解釈のほかに次のいくつかの例が挙げられている。

- ・「日本にむぎつき歌と云も、何事をもうたへども其音節がむぎくにあうを云ぞ」。(四河入海(17 世紀前) 一三・一)
- ・「右之本頗句音節墨譜等令加筆候」。(浄瑠璃, 新うすゆき物語(1741) 下)
- ・諸島会合「鸞座上居, 其鳴音謳音節如」。(自然真営道(1753 頃か) 二四)
- ・「自然に故春太夫の音節の蘊奥を極むることを得たりと云ふ」。(一年有半(1901) 〈中江兆民〉)

表 3

音 節	拍	モーラ	シラブル
大辞典 (1935)	日本大辞書 (1892-93)	国語学辞典 (1955)	日本大辞典言泉 (1928)
シラブル syllable の訳語。 単語の音数、単語の構成単位を 考え得る発音乃至発音群、音節 構成的音素を「音節頂」といひ、 普通は母音であるが、有声子音 や無声子音の場合も稀にある。	タタク・ニウツ (手ナ ドロ)、拍手	mora 元来は韻律学 (prosody)の用語で、 一単語の長さに相当 する時間の単位。韻律 論では子音音表。	英 (語) 父音と母音と の相愛して成りたる音。 綴音、合成音、音節、 熟音
精選版日本国語大辞典 (2006)			
①言語における音声の単位の一 つ。ひとまとまりとして意識 される音声連続。 シラブル→モーラ * 国語学の十講 (1916) 〈上田 万年〉三・二「日本の言葉は 多音節主義である。一つの言 葉が多く音節から成り立つ のを原則としている」 ②声、または音楽の調子。ふし まわしやリズム。* 四河入海 (17世紀前) 一三・一「日本 にむぎつき歌と云も、何事を もうたへども其音節がむぎく にあうを云ぞ」 * 浄瑠璃、新うすゆき物語 (1741) 下「右之本願句音節 墨譜等令加筆候」 * 自然真営道 (1753頃か) 二四、 諸鳥会合「鸞座上居、其鳴音 趣音節如」 * 一年有半 (1901) 〈中江兆民〉 —「自然に故春太夫の音節の 蘊奥を極むることを得たりと 云ふ」	①手のひらを打ち合わ せること。手でもの を打つこと。またそ のさま。 * 信仰之道 (1894) 〈松村介石〉安心立 命、二「拍として掌 を鳴せば」 ②音楽の拍子を構成す る部分 * 楽典初歩 (1888) 〈内 田彌一訳〉「第五十 七条二拍子は、一小 節に二拍を拍つもの なり」 ③音韻論上の単位。 モーラのこと。→モー ラ	英 mora (言語音声に ついて) 音韻連続の長 さの単位。現代の日本 語では、五十音図のそ れぞれのかな (濁、半 濁、拗音を含む) を一 単位とし、それに調音、 促音、撥音を加えて、 103 種のモーラが標準 的に数えられる。「拍」 ともいう。また一般に 「音節」ともいうが 「音節」と音声学上の 「シラブル」にもあて られ、音韻論上の考え 方という間で混同され る恐れがある。	英 syllable 「音節」に 同じ * 国語のため第二 (1903) 〈上田万年〉 促音考「PTKS な どの、前のシラブル にアクセントあるに よって生ずる促音の 場合

上記の用例から判断すると「音節」が出現した一番古い文献は次のようになる。つまり、「音節」ということばは 17 世紀からすでに出現していたことである。そのほかに浄瑠璃 (1741)、自然真営道 (1753) など、17 世紀半ばのいくつかの文献でも「音節」ということばが取り上げられている。国語辞書により、すでに「音節」が出現した時代が 17 世紀であることはわかったが、確実にいつから出現したかは更に国語辞書以外の文献を調べる必要がある。

「拍」の解釈では最初の『日本大辞書』(1882-93) での「タタク・ニウツ (手ナドロ)、拍手」という解釈から『精選版日本国語大辞典』(2006) では更に「音楽の拍子を構成する部分」と「音韻論上の単位。モーラのこと」の二つの意味が追加されている。百年以上経った今日での解釈はいく

つかの意味が増えた一方、明らかに解釈も詳細である。

「音節」の解釈が詳しかった『精選版日本国語大辞典』（2006）の解釈では、「拍」についても次のように「拍」が出現した文献を挙げている。

- ① 信仰之道（1894）〈松村介石〉安心立命、二「拍として掌を鳴せば」
- ② 楽典初步（1888）〈内田彌一訳〉「第五十七条二拍子は、一小節に二拍を拍つものなり」

①での「拍」は「手を打つ」などの意味での使い方、②は「音楽の拍子」の意味で使われた文献用例である。これらの文献からわかるように「拍」は早くもその出現年代が19世紀の後半であることがわかる。したがって、3.1で述べた出現順番は文献上では次のようになる。

国語辞書での出現順：「拍」→「シラブル」→「音節」→「モーラ」

文献上での出現順：「音節」→「拍」→「シラブル」→「モーラ」

つまり、「音節」が「拍」よりももっと早く出現していたことになる。今回の調査では上記の通りであるが、文学作品など、様々なジャンルの文献を調べない限り確定できないが、これは膨大な作業であるため、ここで打ち切っておきたい。

表4

拍
日本大辞典言泉（1927）
（助数）Beat 音の長短の単位。普通音符を一拍として数え、短鞭を左右に往復せしめ、又は手掌を拍ち、或いは足ぶみにして数ふるを常とす。

「拍」の解釈をみると、明治期の辞書では「たたく、拍子、拍手」などの意味でしか解釈されていなかったが、表4で表したように、『日本大辞典言泉』（1927）では初めて英語 Beat の訳から意味を捉えている。これは亀井（1956）で使われた「拍」と比べ、およそ30年も早いことになる。亀井が用いる「拍」の定義は表4で記された辞書の解釈から主な意味をとっているのではないかと思われる。

3.3 表記の不統一

榎垣（1943）では、外来語研究は大正期以後日本で盛んになってきたのであるが、言語学の立場から外来語が取り扱われ出したのは、大体明治30年頃からであり、この種の研究は主として理論的なものであって、言語学の取り扱う問題の一つとして、言語の混淆、借用、影響などとして、言語学の書物の一部分に説かれているに過ぎないと述べている。

また、飛田（2002）では英語の日本語訳の変化について、英語 honey-moon の日本語訳の出現する用例と作品を挙げて次のように述べている。英語 honey-moon の発音は [hʌ'nimu:n] であって、「ハニームーン」となりそうであるが、最初に出てくるのは「ホネームウン」である。今日で

は「ハネムーン」が一般的だが、日本人が英語を学習しはじめた明治前期はすべて「ホネムーン、ホニムーン」であって、明治20年から「ハネムーン、ハニムーン」が登場してくる。英語の綴り honey-moon の *ho* の読みにひかれたのであろう。

上記の例から翻訳上では、綴り上での訳と発音上での訳が両方かなり影響されていることがわかるが、綴り上での訳が先であることは明らかである。果たして、今回の調査対象となった単語でも、同じような傾向が見られるのであろうか。

インターネット上や諸文献からしばしば「シラバル」と「シラブル」の表記について統一されていないことに気がつく。今日では「シラブル」が一般的に使われ、辞書でも「シラブル」で調べられる。もちろん「シラブル」が最初に出現した『辞書日本大辞典』(1928) (表5) でも「シラバル」という表記は見当たらなかった。

表5

日本大辞典(1928)		
音 節	シラバル	シラブル
—	—	英(語) 父音と母音との相愛して成りたる音。綴音、合成音、音節、熟音

果たして、なぜ「シラバル」という表記が出現したのであろうか。単なる翻訳上でのミスであろうか。これを解明するため、まず、ヨーロッパの諸言語での綴り表記から検討していくことにする。

syllable (英)	silbe (独)	syllabe (仏)
silaba (西)	sillaba (伊)	sílaba (葡)

文字表記からわかるように、英・独・仏語では語尾が /e/ で終わっているのに対し、西・伊・葡語では語尾が /a/ で終わっていることがわかる。また /e/ や /a/ の前のアルファベットを見ると、英語だけが /l/ であって、ほかの言語では /b/ であることもわかる。したがって、「シラブル」も「シラバル」も確かに英語からの訳語であることが明らかになる。

では、なぜ二つの訳語が出現するのであるのだろうか。次に英語の発音記号から分析してみよう。

syllable (英) [siləb(ə)l]

日本語には [ə] の発音がないため、[e] を [a] に換えて発音するのが一般的である。外来語表記でも同様である。したがって、音声表記 [siləb(ə)l] を日本語で発音するとすれば、「シラバル」になるのは当然なことである。「シラブル」は syllable の綴り上での翻訳だと思われる。

ところが、「モーラ」では、辞書でも表記上不同一の現象が見られた。

表 6

モラ／モーラ	
大辞林 (1993)	国語学辞典 (1955)
ラ mo'ra ①ラテン語で作法上用いられていた概念で等時間のリズムを捉える単位。モラ ②拍	英 mora 元来は韻律学 (prosody) の用語で、一単音節の長さに相当する時間の単位。韻律論では子音音表。 <u>モーラ</u>

「モーラ」が最初に出現した『国語学辞典』(1955)を始め、ほとんどの辞書では「モーラ」という表記を使っているが、『大辞林』(1993)では、「モラ」(ラテン語訳)という表記を使っている。これは音声学の専門辞書である『音聲學大辞典』(1971)でも「モラ」を使用し、同様に語源はラテン語の "mo'ra" であると解釈している。したがって、ラテン語からの訳であれば「モラ」で、英訳であれば「モーラ」になるのではないかと考えられるが、まずは、次の英語の音声表記から考察してみよう。

mora (英) [mo':rə]

英語でも実は、綴り上では「モラ」であるが、発音からみれば「モーラ」になる。それゆえ、mora も「シラブル」と同じような視点で訳されていると思われる。これは、本稿の最初で述べた、川上 (1972) の「「モーラ」はラテン語の mora (モラ) に由来するが、英語を経て日本に入ってくる間に、どこかで「モ」が「モー」に延びてしまったものらしい」という、文中の「どこかで」の解明に非常に重要なポイントとなる。

3.4 意味分類

同義語	同義語
「シラバル／シラブル」＝「音節」	「モラ／モーラ」＝「拍」

今回の調査によって現在の言語学で使われている解釈からは上記のように分類できる。つまり「シラバル」と「シラブル」、「モラ」と「モーラ」は翻訳の視点は多少異なるが、意味上ではまったく同じであると言っていい。また、事実上カタカナ表記と漢字表記の同義語であることもはっきり言える。

4. ま と め

今回の調査では、主に明治期から現代までの国語辞書における「音節・拍・モーラ・シラブル」

四つの術語について解釈を調べ、出現時期および意味の変遷などについて調べた結果、辞書上と文献上での出現順と出現年代がわかった。ところが、辞書上での出現年代は、辞書の発刊が毎年続いているわけではなく、発刊年度が10年以上離れている場合（辞書が発刊されていない可能性も高い）もあったため、正確にことばの出現年代は言えないが、大体の出現年代は本調査で明らかになった年代でいいだろう。「音節」と「拍」の更に詳しい解釈や出現年代を調べるためには、漢和辞典や漢語辞典などを調べる必要があることと、「モーラ」と「シラブル」の詳細は外来語辞典、和英辞典などを含む文献を調べる必要もある。また、文献上でも正確な出現年代を出すためには、国語辞書以外の辞書、文学作品など、様々なジャンルの文献を調べる必要がある。これらは膨大な作業であるため、今後の課題としたい。しかし、本調査では四つの術語ともほとんど明治期以降出現していたことがわかったため、今後は明治期以降の辞書や文献に着目して研究を進めていきたいと思う。

付 記

本稿を書くにあたり、本学日本語学科客員教授飛田良文先生より貴重なご助言をいただいた。記して感謝申し上げます。なお、本研究で調査対象となった辞書の大半は明海大学図書館に備えてある。特に近代語研究関連文献の一部は飛田良文先生のご盡力で購入されたということである。

調査辞書（年代順）

- 木村正辞・横山山清（1871-84）『語彙』大空社
- 物集高見（1878）『日本小辞典』大空社
- 佐々木弘綱（1879）『雅小言解』大空社
- 鈴木重嶺（1879）『雅言解』大空社
- 白井憲成（1881）『雅略言解』大空社
- 近藤真琴（1885）『ことばのその』大空社
- 物集高見（1888）『ことばのはやし』大空社
- 大久保忠保（1888）『掌中雅言彙』大空社
- 高橋五郎（1888）『漢英対照いろは辞典』大空社
- （1888-89）『和漢雅俗いろは辞典』大空社
- 大槻文彦（1889-91）『日本辞書言海』大空社
- 服部元彦（1890）『雅俗俗雅日本小辞典』大空社
- 弾舜平（1891）『俗語雅調』大空社
- 岡 千春（1891）『言葉の手引き』大空社
- 大久保初雄（1891）『国文小辞典』大空社
- （1892）『訂正増補国文小辞典』大空社
- 服部元彦（1892）『日本小辞典増補再版』大空社
- 高橋五郎（1892-93）『増訂二版和漢雅俗いろは辞典』大空社
- 山田美妙（1892-93）『日本大辞書』日本大辞書発行所
- 物集高見（1894）『日本大辞林』宮内省
- 三田村熊之介（1895）『日本新辞書』大空社
- 藤井乙男・草野清民（1896）『帝国大辞典』三省堂
- 林圀臣・棚橋一郎（1897）『日本新辞林』三省堂
- 落合直文（1898-99）『ことばの泉』大倉書店
- （1902）『国書辞典』大空社

- 岡吉胤 (1902)『国語集解』大空社
 金沢庄三郎 (1907)『辞林』三省堂
 松井簡治・上田万年 (1915・1919)『大日本国語辞典』富山房・金港堂
 金沢庄三郎 (1925)『広辞林』三省堂
 落合直文 (1927)『日本大辞典』大倉書店
 金沢庄三郎 (1928)『小辞林』三省堂
 大槻文彦 (1932・1935)『大言海』富山房
 新村出 (1935)『辞苑』博文館
 下中邦彦 (1935)『大辞典』平凡社
 石川貞吉他 (1936)『大辞典』平凡社
 金田一京助 (1941)『明解国語辞典』三省堂
 新村出 (1949)『言林』全国書房
 ——— (1954)『言苑』博友社
 東京堂 (1955)『国語学辞典』国語学会
 新村出 (1955)『広辞苑』初版 岩波書店
 時枝誠記 (1956)『例解国語辞典』中教出版
 金田一京助・佐伯梅友 (1959)『新選国語辞典』小学館
 見坊豪紀 (1960)『三省堂国語辞典』初版 三省堂
 西尾実・岩瀬悦太郎・水谷静夫 (1963)『岩波国語辞典』初版 岩波書店
 山田俊雄・築島裕・小林芳規 (1965)『新潮国語辞典』新潮社
 新村出 (1969)『広辞苑』第二版 岩波書店
 金田一京助・山田忠雄・柴田武・酒井憲二・倉持保男・山田明雄 (1972)『新明解国語辞典』初版 三省堂
 小学館国語辞典編集部 (1973)『日本国語大辞典』初版 小学館
 金田一京助・山田忠雄・柴田武・酒井憲二・倉持保男・山田明雄 (1974)『新明解国語辞典』第二版 三省堂
 新村出 (1976)『広辞苑』第二版補訂版 岩波書店
 日本音聲学会 (1976)『音聲学大辞典』三修社
 金田一春彦・池田弥三郎 (1978)『学研国語大辞典』初版 学習研究社
 国語学会編 (1980)『国語学大辞典』東京堂出版
 金田一京助・山田忠雄・柴田武・酒井憲二・倉持保男・山田明雄 (1981)『新明解国語辞典』第三版 三省堂
 尚学図書 (1981)『国語大辞典』小学館
 大槻文彦 (1982)『新編大言海』富山房
 時枝誠記・吉田精一 (1982)『角川国語大辞典』角川書店
 新村出 (1983)『広辞苑』第三版 岩波書店
 あらかわそおべえ (1984)『角川外来語辞典』角川書店
 三省堂編修所 (1984)『広辞林』三省堂
 山田俊雄・白藤稔幸他 (1985)『新潮現代国語辞典』初版 新潮社
 尚学図書 (1986)『国語大辞典』小学館
 西尾実・岩瀬悦太郎・水谷静夫 (1986)『岩波国語辞典』第四版 岩波書店
 金田一春彦 (1988)『学研国語大辞典』第二版 学習研究社
 松村明 (1988)『大辞林』初版 三省堂
 金田一京助・山田忠雄・柴田武・酒井憲二・倉持保男・山田明雄 (1989)『新明解国語辞典』第四版 三省堂
 梅棹忠夫・金田一春彦・阪倉篤義・日野原重明 (1989)『日本語大辞典』講談社
 西尾実・岩瀬悦太郎・北谷郎夫 (1990)『岩波国語辞典』第四版デスク版 岩波書店
 新村出 (1991)『広辞苑』第四版 岩波書店
 亀井俊介 (1992)『スコットフォーズマン英和辞典』角川書店

- 見坊豪紀・金田一京助・金田一春彦・柴田武・飛田良文（1992）『三省堂国語辞典』三省堂
 松村明・佐和隆光・養老孟司（1993）『大辞林』三省堂
 森岡健二・徳川宗賢・川端善明・中村明・星野晃一（1993）『集英社国語辞典』初版 集英社
 三省堂編修所（1993）『辞林 21』三省堂
 西尾実・岩瀬悦太郎・水谷静夫・安江良介（1994）『岩波国語辞典』第五版 岩波書店
 松村明（1995）『大辞泉』小学館
 亀井孝・河野六郎・千野栄一（1996）『言語学大辞典術語編』第六巻 三省堂
 金田一京助（1996）『明解国語辞典』三省堂
 市川孝・見坊豪紀・金田弘・進藤咲子・西尾寅弥（1997）『現代新国語辞典』三省堂
 金田一京助・山田忠雄・柴田武・酒井憲二・倉持保男・山田明雄（1997）『新明解国語辞典』第五版 三省堂
 新村出（1998）『広辞苑』第五版 岩波書店
 小西友七（1998）『ジーニアス和英辞典』大修館書店
 松村明・佐和隆光・養老孟司（1999）『新辞林』三省堂
 松村明・山口明穂・和田利政（1999）『旺文社国語辞典』旺文社
 森岡健二・徳川宗賢・川端善明・中村明・星野晃一（2000）『集英社国語辞典』集英社
 西尾実・岩瀬悦太郎・水谷静夫・大塚信一（2000）『岩波国語辞典』第六版 岩波書店
 小学館国語辞典編集部（2001）『現代国語例解辞典』小学館
 ———（2001）『日本国語大辞典』小学館
 宇野哲人（2001）『新修広辞典』集英社
 北原保雄（2002）『明鏡国語辞典』初版 大修館書店
 ———（2003）『明鏡国語辞典』第二版 大修館書店
 林四郎・野元菊雄・南不二男・国松昭（2004）『例解新国語辞典』三省堂
 松井栄一（2005）『小学館日本語新辞典』初版 小学館
 山田忠雄・柴田武・酒井憲二・倉持保男・山田明雄（2005）『新明解国語辞典』第六版 三省堂
 小学館国語辞典編集部（2006）『精選版日本国語大辞典』小学館

参考文献（年代順）

- 塚垣實（1943）『増補日本外来語の研究』大阪青年通信社
 亀井孝（1956）『「音韻」の概念は日本語に有用なり』『国文学攷』
 金田一春彦（1967）『音節、モーラ及び拍』『日本語音韻の研究』東京堂出版
 川上泰（1972）『日本語アクセント法』学書房出版
 飛田良文（2002）『西洋語表記の日本語表記への影響』『現代日本語講座第6巻文字・表記』明治書院
 松井栄一（2005）『国語辞典はこうして作る——理想の辞書をめざして』有限会社港の人